

## 第2章

### 数字で見る病院の活動

# 患者受入・転院搬送実績

患者数データはいずれも以下の期間で集計。

**前震対応**

2016年4月14日21:26 ~ 同年4月15日16:59

**本震対応**

2016年4月16日 1:25 ~ 同年4月18日 8:29

※転院件数については、災害急性期後にも影響があったことから4月14日～4月30日までの実績。

※4月14日 17:00～本震発生までは通常どおり救急外来を運用  
4月18日 8:30～は救急外来で通常運用開始

※データは、災害対応時のトリアージタグや災害カルテなどの紙資料をもとに算出。

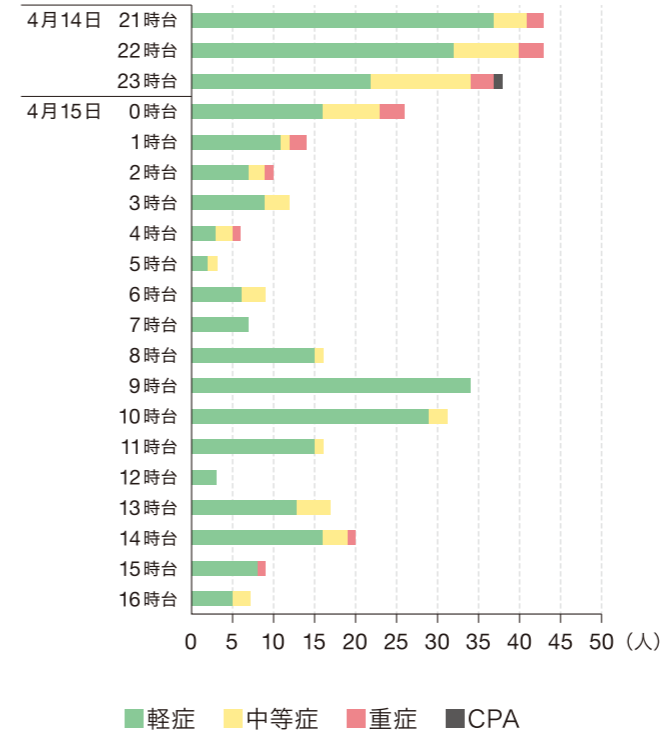
注)① 国際疾病分類ICD10コードの頭文字にSあるいはTを含む傷病名がある場合は「外因性」、SあるいはTを含む傷病名がない場合は「内因性」として分類した。なお、「その他」については、災害モード期間中につけられた病名がなかった患者であること。  
② 受付日が確認できなかったものについては、災害モード①の場合は4月14日、災害モード②の場合は4月16日の受付で統一した。受付時刻が不明なものについては、4月14日は21:26、4月16日は1:25(それぞれ発災時刻)、それ以外の日は0:00受付とした。  
③ ②により、4月14日21時台には33人の受付時刻不明者(さらにうち28人は日付も不明)、4月15日0時台には9人の受付時刻不明者、4月16日1時台には71人の受付時刻不明者(さらにうち23人は受付日も不明)、4月17日0時台には9人の受付時刻不明者を含む。

**受入患者数 (2016年4月14日～4月18日)**

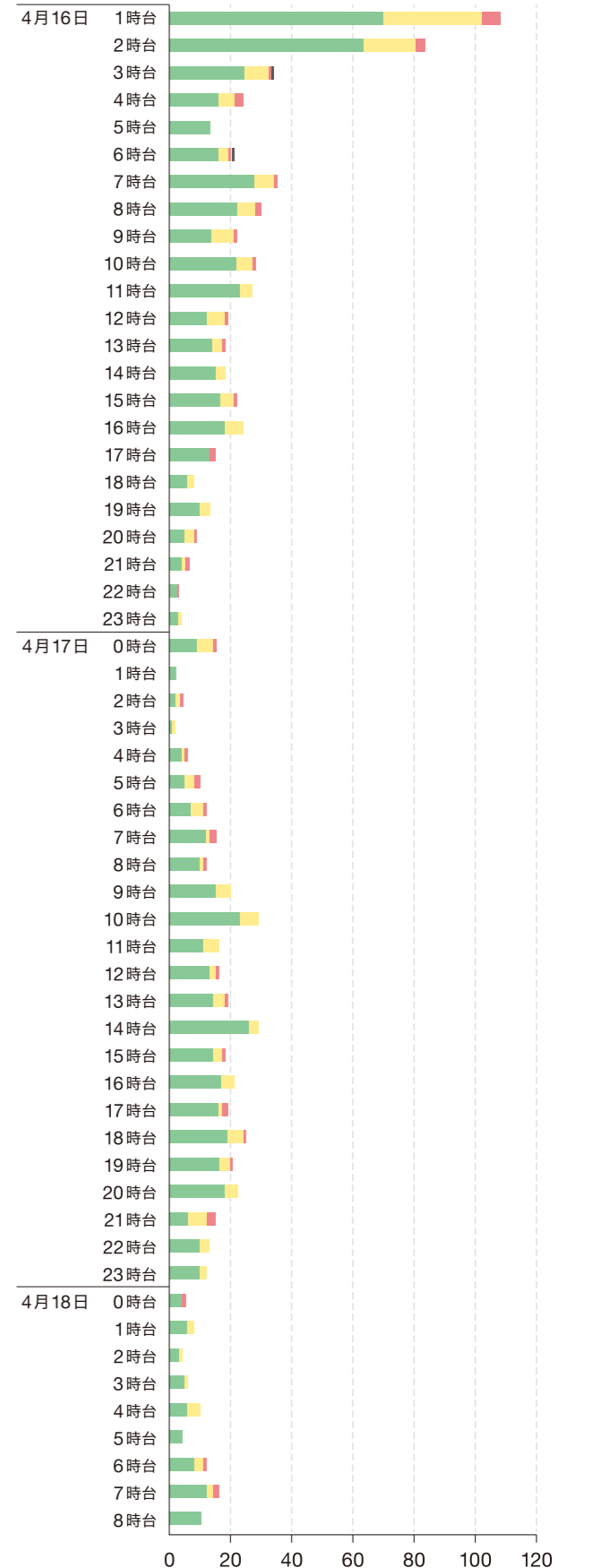
	日付	時間	軽症	中等症	重症	CPA	合計
前震対応	4月14日	21:26 ~ 23:59	91	24	8	1	124
	4月15日	0:00 ~ 16:59	199	32	9	0	240
本震対応	4月16日	1:25 ~ 23:59	431	124	28	2	585
	4月17日	0:00 ~ 23:59	280	74	19	0	373
	4月18日	0:00 ~ 8:29	58	13	4	0	75
	合計	約74.5時間	1,059	267	68	3	1,397

**受入患者時系列推移数 (2016年4月14日～4月18日)**

前震対応(時間別)



本震対応(時間別)

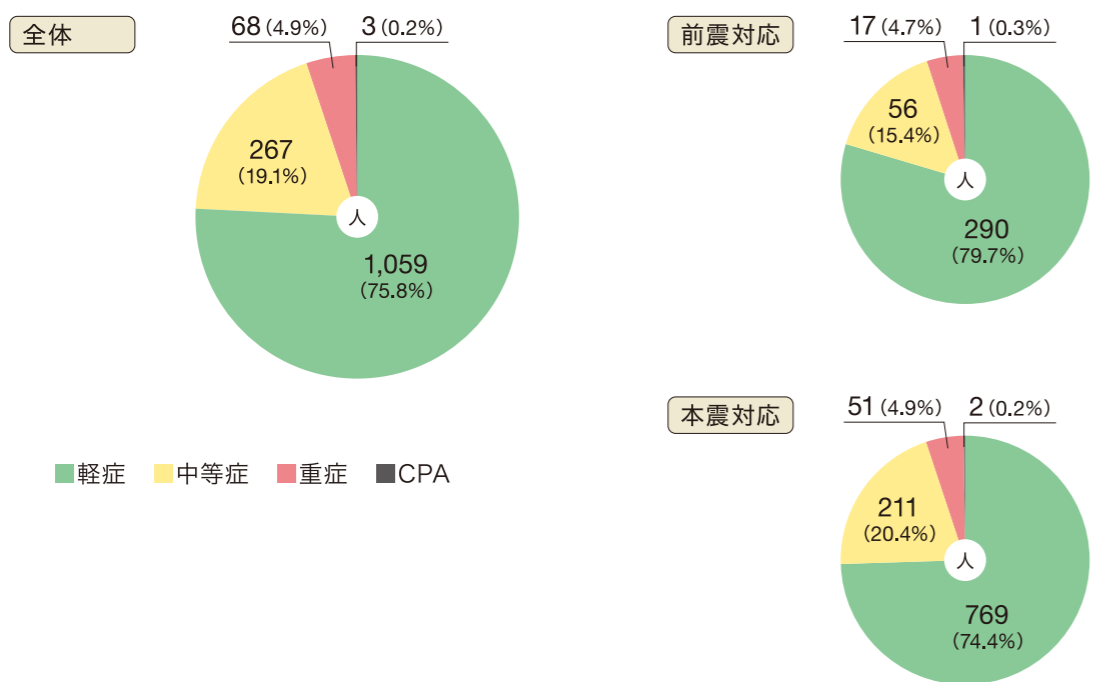


前震・本震と相次ぐ地震の中…  
4月18日の未明までに  
1397人の患者が押し寄せた。

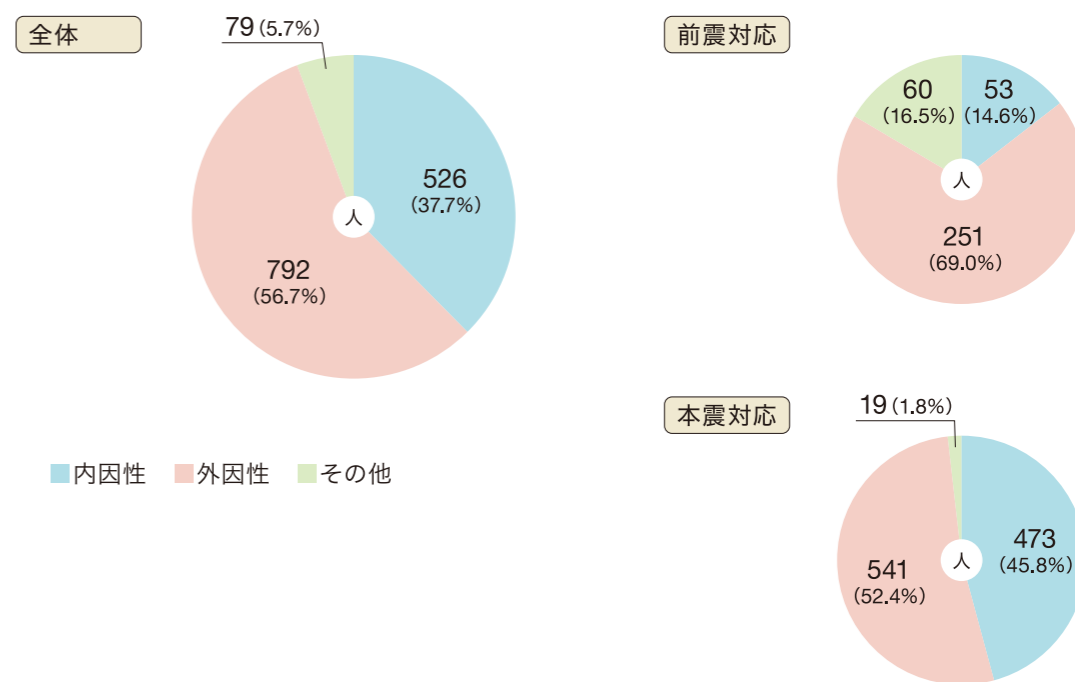


紙媒体からのデータ化を行った

トリアージ区分割合

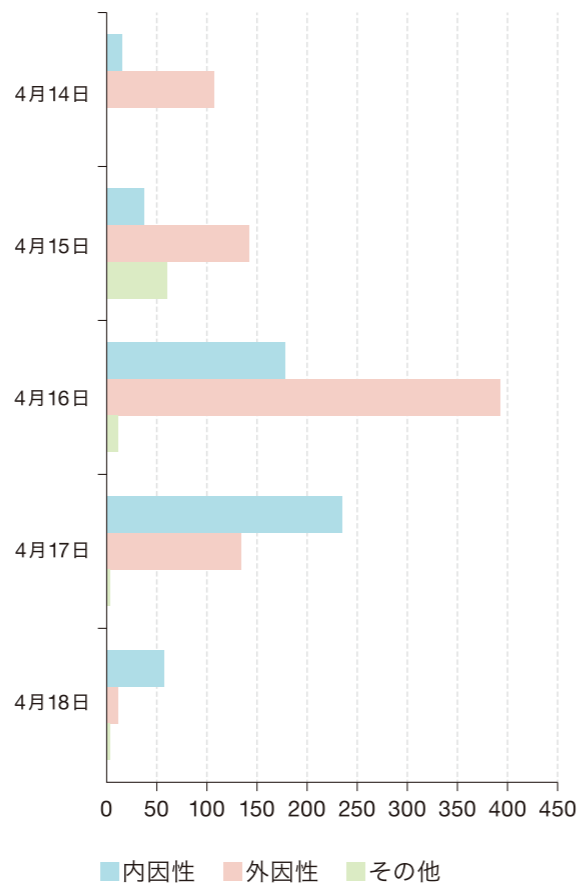


内因性疾患・外因性疾患割合

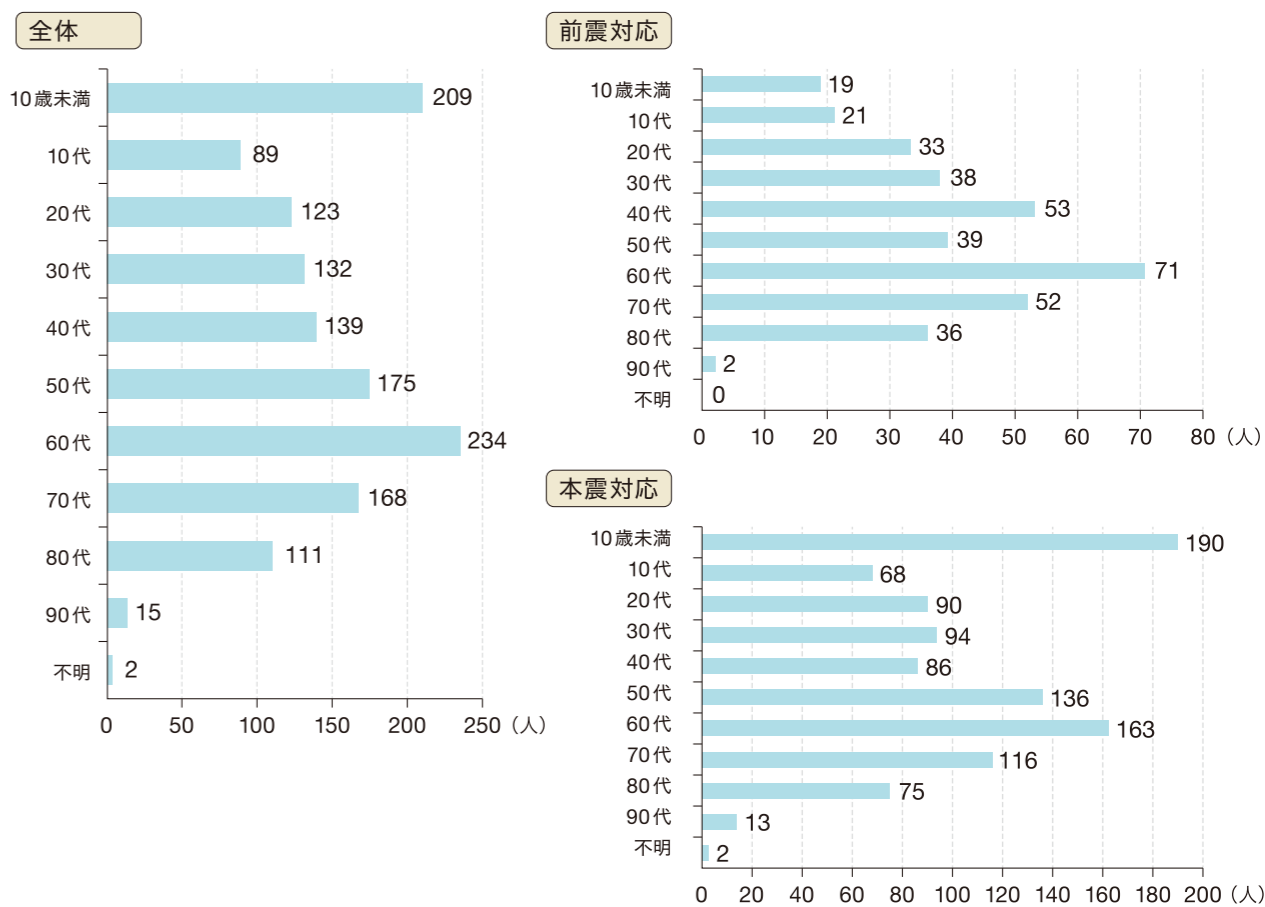


内因性・外因性別患者数推移 (災害モード全体)

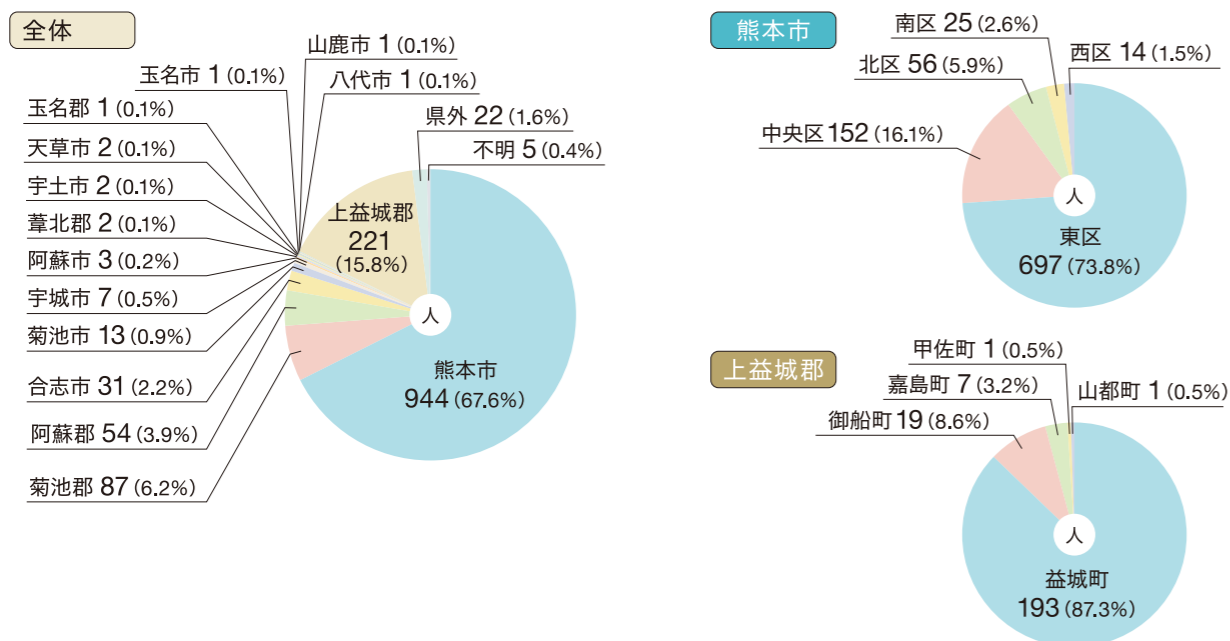
日付	時間	内因性	外因性	その他	合計
4月14日	21:26～23:59	15	108	1	124
4月15日	0:00～16:59	38	143	59	240
4月16日	1:25～23:59	179	393	13	585
4月17日	0:00～23:59	235	135	3	373
4月18日	0:00～8:29	59	13	3	75
合計	約74.5時間	526	792	79	1,397



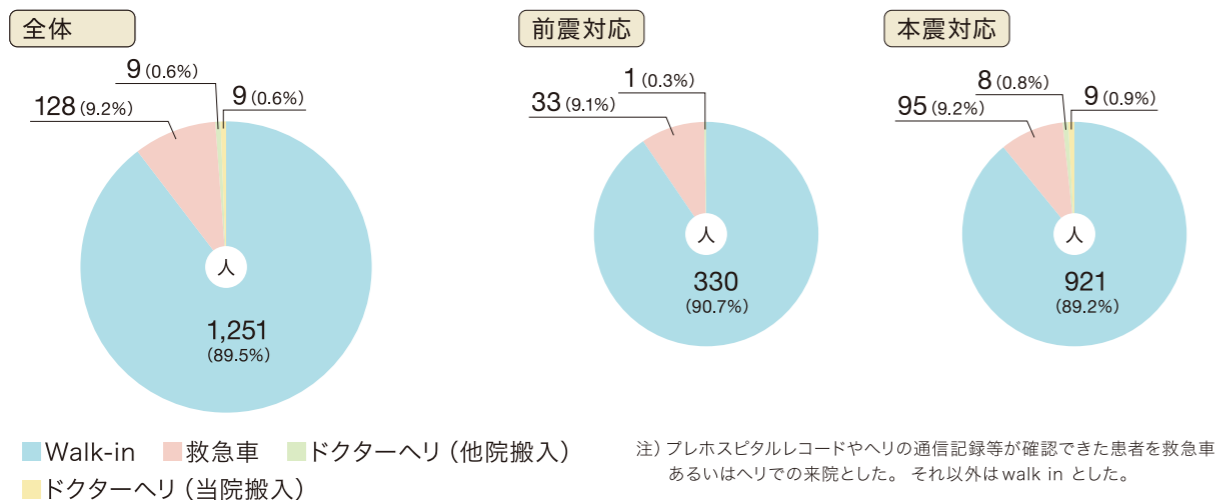
患者年代内訳



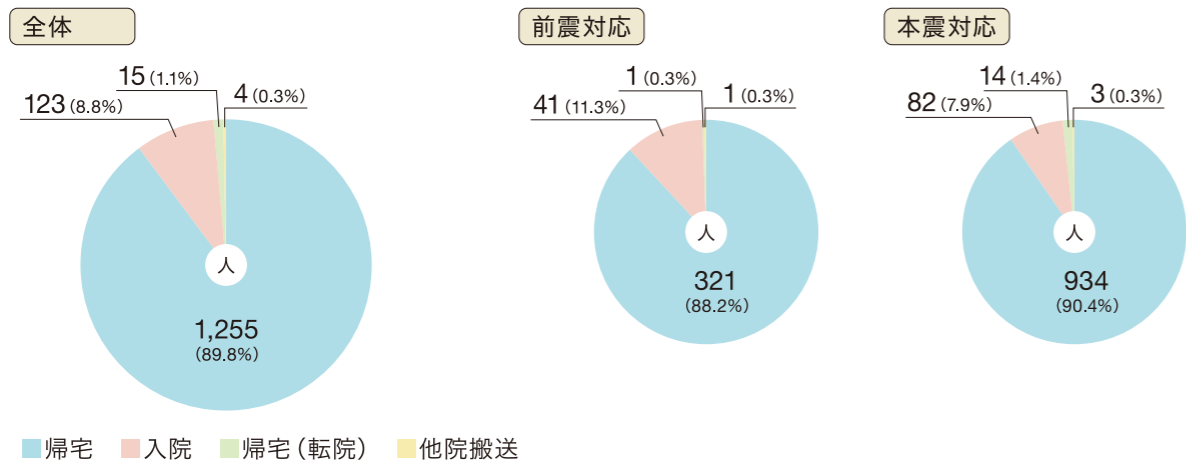
### 来院患者地域内訳



### 来院方法内訳

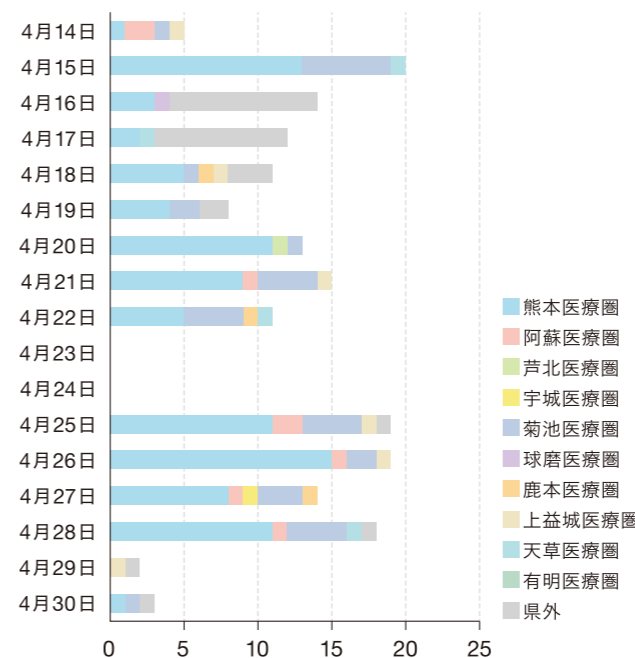


### 転帰内訳



### 日別・医療圏別転院件数 (4月14日～4月30日)

	熊本医療圏	阿蘇医療圏	芦北医療圏	宇城医療圏	菊池医療圏	球磨医療圏	鹿本医療圏	上益城医療圏	天草医療圏	県外	合計
4月14日	1	2	—	—	1	—	—	1	—	—	5
4月15日	13	—	—	—	6	—	—	—	1	—	20
4月16日	3	—	—	—	—	1	—	—	—	10	14
4月17日	2	—	—	—	—	—	—	—	1	9	12
4月18日	5	—	—	—	1	—	1	1	—	3	11
4月19日	4	—	—	—	2	—	—	—	—	2	8
4月20日	11	—	1	—	1	—	—	—	—	—	13
4月21日	9	1	—	—	4	—	—	1	—	—	15
4月22日	5	—	—	—	4	—	1	—	1	—	11
4月23日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
4月24日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
4月25日	11	2	—	—	4	—	—	1	—	1	19
4月26日	15	1	—	—	2	—	—	1	—	—	19
4月27日	8	1	—	1	3	—	1	—	—	—	14
4月28日	11	1	—	—	4	—	—	—	1	1	18
4月29日	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	2
4月30日	1	—	—	—	1	—	—	—	—	1	3
総計	99	8	1	1	33	1	3	6	4	28	184



# 周産期医療 大きな打撃



熊本市民病院の1階に避難し、生まれたばかりの乳児を抱く女性  
—4月16日午前4時5分ごろ、熊本市東区（横井誠）

## 拠点の熊本市民病院が被災

4月16日未明、本報の激しい揺れが襲った熊本市民病院。産医師は、NICUとGCU新棟が倒れた熊本市民病院。出生児治療関係者の赤ちゃん38市東区の一帯は、避難した大人の搬送を急ぐための電話が院内まで通まっていた。生まれ続けていた。連絡を受けた熊本の赤ちゃんや、新生児、本大病院（同市中央区）では、集中治療室（NICU）にいた。救急車運送の委託先と連絡がとれなかった。医師自身がハンドルを握った。3往復で10人を搬送。ベットの足が折れた。ヘリを呼んで鹿児島や福岡の病院でも「何人を受け入れられますか」。新生児科部長の川瀬が、全員の搬送が終わったのは16日午後、川瀬医師は「もしもなかったら、体温が保てず命の危険があった。震災がなかったのが幸いだったと振り返る。搬送はできたが手術を許さない治療は難。38人が受けた大きな打撃だった」と語る。

### 熊本地震 連鎖の衝撃

医療福祉教育局

③

2016.5.18

## NICU機能停止 妊婦、新生児 県外搬送も



地震の影響で、診療を中止した熊本市民病院。玄関前のテントで、薬の処方箋を発行した  
—4月20日、熊本市東区（森本修代）



熊本市民病院の駐車場に開設された小児科仮設診療所  
—4月16日、同市中央区（清島理紗）

県内の医療関係者でつくる熊本県内新生児医療連携会が示した試算では、年間1000人近い妊婦と新生児30〜40人が県外に搬送される見込み。市民病院は東区で建て替えが計画されているが、川瀬医師は「その間、妊婦や赤ちゃんの県外搬送は続く。家族の負担も重い。建て替えるを急いでほしい」と訴える。

熊本市民病院は、総合周産期母子医療センターとして、県内の新生児医療の中核を担う。千名に満たなかったり、心臓手術が県外からも引き受け、その実績は「全国有数」とされる。しかし地震で建物の壁などが崩落。NICUを確保する病院が「一気に機能停止に陥った」とは県内で例がないという。

県内のNICUは、市民病院18床、熊本大病院12床、福岡大病院18床。地震的1割の機能が失われたことになる。小さい赤ちゃんの心臓手術ができるのは、市民病院を含め九州で3カ所だけ。リカソに減ったことで、他県の病院への影響も大きい。

仮診療所を一時設置。基幹病院への患者集積を避けるため、医師会が大型連休中の休日に在宅診療を喚び出した。同センターは、連日明けに通常の診療に戻った。

市民病院の被災を受けて、熊本大病院を中心に地域医療を支える態勢づくりも進む。同大産科婦人科は「熊本地帯緊急周産期医療対策プロジェクト」を立ち上げ、妊婦と出産可能な病院をつなぐネットワークを構築。

熊本市は2008年から、同病院の南館（1979年完成）が耐震診断を済ませず、北館（04年完成）も耐震強度に不安があるとして、建て替える検討。しかし事業費や資材値が高騰したため、建て替えるは「病院経営を圧迫する」として凍結されていた。

地震は、夜間の小児救急医療体制も直撃した。熊本地域医療センター（同市中央区）で、開業医や熊本大病院の医師らが協力して診療する仕組みで、「熊本市民病院の患者搬送にも使われた。

同大病院の川瀬秀隆・産科婦人科教授と、中村公俊・小児科准教授も「当直の医師同士がすぐに連絡できる態勢ができ、スムーズな連携につながっている」と話す。（森本修代）